

# 武雄さんの夢奪った戦争

広島で被爆した母が遺した手記について、夏このコラムで書いてきた。今年は「武雄」という名の少年の話から始めたい。

原爆投下から4日目、母は山間部の親類宅に逃げる途中で、「ミルク缶を大切に抱いたおぼ」と偶然出会う。「それは、いとこの遺骨を入れたミルク缶でした」

河野武雄さんは、親元を離れ広島市内の兄の家に下宿、旧制広島二中（現・県立広島観音高校）に通っていた。民家などを壊して防火地帯をつくる建物疎開の作業に学徒動員で出ていた8月6日、被爆死した。

いま、武雄さんの面影を語るのはいく教えるほどだ。

「医者志望のかしこい子でね。よくうちに泊まりにきて姉たちと勉強しよったんよ」と、87歳になる筆者

の叔母（母の妹）。武雄さんの兄の娘は「朝、父が巻いてあげたゲートル（脚絆）で遺体の身元がわかったそうです」。そのゲートルは広島平和記念資料館に保存されている。

78年前、建物疎開作業で爆心から約5000級の河岸に集合した二中学生321人はみな命果てた。「全滅」の悲劇は映画にもなった。

体調不良で休んだり遅刻したりして、生きのびた生徒もいた。おのおのがつらい戦後を生きてきた。

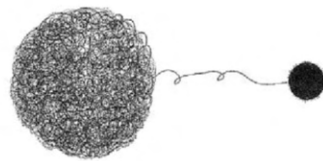
直前に転校して被爆を逃れた光成洋さん（91）は広島観音高校の音楽教師になった。周囲には自身が二中生だったことは伏せた。互いに連絡を取り合うようになったのは、息子を失った父母が老い、慰霊碑に姿を見

せなくなってからだ。当初は20人ほどいた生存者も、今は半分ほど。「最後の一人になるまでお花と線香を出すつもりです」

あの朝、広島駅に向かう列車が空襲警戒警報で遅れた。中田博雄さん（91）は、二中の同級生数人と広島駅前で路面電車を待っていた時に原爆が炸裂、吹き飛ばされた。崩れたホームの屋根を乗り越え逃げ込んだ広場では、目の玉や内臓が飛び出た人が「助けて」とうめいていた。自身もケロイドに苦しんだ中田さんは

「原爆の実相は地獄だということ、私は語り続けたい」という。

戦争中、労働力を補うため大勢の旧制中学生たちが全国で軍需工場や食料生産などに動員された。空襲や



「思考から精製されたアイデア」

絵・皆川明

事故の犠牲者も多く、旧文部省資料では死者1万9666人。一方、資料館によると広島では約72000人の建物疎開に従事していたという。

広島市立第一高等女学校（市女、現・市立舟入高校）でも、建物疎開の作業中だった1、2年生541人全員が命を奪われた。専攻科の生徒だった加藤八千代さん（94）は動員先の工場が月1度の休みだった。

生と死を分けたのは、偶然か。母校の学徒動員を調べ大学卒論にまとめた青山沙香さん（25）によると、休みの生徒を建物疎開に当たらせる計画もあった。だが教師が「生徒は疲れている」と訴え、8月6日に休むことが認められたという。

市女だけではない。軍刀で床をたたいて建物疎開への動員を迫る軍人に、空襲から隠れるところがない作業の危険を説いて反対した教師。独自の判断で生徒を派遣しなかった校長。2004年刊行の「慟哭の悲劇はなぜ起こったのか」は、そんな彼らの姿を当時の手記や記録から掘り起こしている。

軍国の時勢に「軍都」広島で、理不尽な動員にあらがった教育者がいた事実は、多くが思いを共有していたことをうかがわせる。加藤さんは卒業時、恩師が「十分学ばせずに送り出すのを悔やむ」と語ったのを覚えている。「教えたい」「教え子を守る」。人間として当然の感情と理性を踏みこむ戦争が、憎らしい。